

ティーチング・ポートフォリオ

健康科学大学 健康科学部 リハビリテーション学科 理学療法学コース

助教 大塚 篤也

1. 教育の責任

理学療法士は専門技術職である以上、社会の中で必要不可欠な職種となるべく、研鑽を続け発展していく必要があります。そのためには、社会的ニーズの変化を的確に捉えた柔軟性のある専門技術職教育と、社会的ニーズが変化しても揺るがない普遍的な理論や知識などを熟知させる必要性がある。

近年、文部科学省はあらゆる分野や領域の教育機関において、ICT や先端技術の基盤の整備を推進しており、養成場面においても、様々な先端技術の活用による教育方法等の改善が重要であると指摘している。特に、リハビリテーション分野においては、急速に進行する医療技術の高度化により理学療法士の活動領域が多様化しているため、新たなツールと方法を用いた教育戦略の模索は、専門技術職を養成する教育機関にとっても新しい出発点であると言える。そのため、国家試験を合格するための知識と技術に加えて、常に革新する医療現場のリアリティを学生に伝えることが必要である。

私は、健康科学大学のリハビリテーション学科において、主に理学療法学コースの専門教育科目を担当しています。以下に、2021 年度以降に担当した科目を列挙する。

2023 年度

科目名	時期		受講者
運動学実習	前期	必修	名
物理療法学	前期	必修	名
			名
			名
			名

2022 年度

科目名	時期		受講者
運動学実習	前期	必修	名
理学療法演習Ⅲ	前期	必修	名
物理療法学	前期	必修	名
			名
			名

・授業外活動

本学での授業の他に、以下のような活動をしている。

1. 日本スポーツ理学療法学会 専門会員
2. 日本物理療法研究会 専門会員
3. 学生・教育・卒後委員会
4. 山梨県中央市高齢者サロン利用者 振動刺激トレーニングを導入した老年症候群予防の取組

1.2の活動において、私は物理療法機器である振動刺激をトレーニングに応用する研究活動を行っている。振動刺激をスポーツ業界でのコンディショニングプログラムとする普及的活動を実践している。また、3.の活動において、近年では振動刺激トレーニングがフレイル・サルコペニアといった老年症候群を予防する可能性を秘めていることから、現在、山梨県中央市の社会福祉協議会と介護老人保健施設 田富荘の理学療法士と共同して、高齢者サロンにて振動刺激トレーニングを導入した老年症候群予防の取組を実施している。

2. 教育の理念・目的

学生には国内だけでなく、海外の理学療法の現状にも関心を寄せ、広い視野で理学療法の現状を理解してほしいと考えている。そのために、最新のトピックを取り入れるために、常に最新の情報を文献や学会などを通じて収集するよう努めている。

また、私が理学療法士養成校に学生として在籍していた頃は、多くの失敗を経験し、その都度反省を繰り返すことがあった。しかし、学内の教員や先輩方、臨床実習の指導者、そして患者さんたちから多くの叱咤激励を受けました。そのため、私の教育の理念と目的は、「学生のうちは失敗は避けられないものであり、重要なのは失敗から学び、それを将来に生かす力を養うこと」である。学生に対して、決まり切った答えを押し付けるのではなく、「行動や経験から何を学べるか」を考えさせ、成長の機会を大切に、将来の可能性を広げていくことを大切にしている。そのため、授業内で正解とは異なる回答が出た場合でも、絶対的に否定せず、個々の成果を認める姿勢を持っている。

理学療法士の仕事は、高齢者や障害者といった社会的に弱い立場にある方々と向き合ったとき、最後まで諦めずに支え続けることであると考えている。私は、こうした教育体験を通じて学んだ学生たちが、将来理学療法士として社会的弱者の方々の側に立った際に、決して諦めず、忍耐強く、対象者の将来を支える存在となると信じている。

3. 教育の方法

○現場に即した実践的授業

急速に進行する医療技術の高度化から、理学療法士の評価・治療方法も先端技術を活用したものが増えている。

運動学実習の科目では、主に立ち上がりや歩行動作の観察・分析方法を指導している。理学療法評価において動作の観察・分析スキルは必須のものであり、理学療法の対象となる問題点が十分に把握できるかどうかは、これらが出来るか否かにかかっている。しかし、従来は肉眼で患者の動作を観察し、その結果から治療対象となる動作の異常性の原因を抽出しており、高度なスキルを要することが問題として挙がっていた。近年では iPhone や iPad で撮影し、その動画をパソコンで編集することで簡単に解析することが可能となり、臨床実習施設でも取り入れていることから、学生同士で動作の観察をさせ、動作の特徴を細かく分析させている。また、三次元動作分析や筋電図などの機器を使用した分析など、最新のトピックを取り入れた教育方法を実施している。

物理療法学の科目では、臨床実習で実際に治療として実践することから、実際に機器を使用して、学生同士で治療を行わせている。物理療法機器は操作を誤ると患者に大きな被害を及ぼすことから、特に各物理療法機器の注意・禁忌事項は臨床で生じた例を含めて徹底した指導を行っている。また、物理療法機器は年々新たな機能を取り入れてバージョンを上げており、最新の物理機器にも対応できるよう、本科目でも最新のトピックを取り入れた教育方法を実施している。

○自己評価能力の育成

学生たちが自己評価能力を養うことは重要であると考え。そのために、授業前にリハビリテーション、スポーツ、社会福祉分野の最新ニュースなどを取り上げ、解説を行っている。これにより、学生に医療技術の進歩や社会情勢の変化がリハビリテーションへのニーズに影響を与えることを理解させている。

また、教育の機会は授業や学内活動だけにとどまらず、クラブやサークルなどの学外活動も含まれる。そのため、日常的な挨拶や身だしなみといった基本的なマナーを身につけるための指導も行っている。

4. 教育の成果・評価

全ての授業科目に対して学生による授業評価アンケートを実施している。

運動学実習では、平均値がすべて 4.5 以上であり、学生の評価は良い。また、授業の理解については、理解できた（よくできた、どちらかといえばできた）者が 9 割以上であり、学生自身も満足している。

物理療法学では、平均値がすべて 4.5 以上であり、学生の評価は良い。また、授業の理解については、理解できた（よくできた、どちらかといえばできた）者が 9 割以上であり、

学生自身も満足している。

5. 今後の目標

短期目標：わかりやすい授業を心掛ける

近年、答えだけ知りたがる学生が増えている。全て教えてしまうのではなく、その手段と過程を十分に指導する。学生は短絡的に答えを知りたがり、その手段と過程を飛ばしてしまうため、答えを導き出すプロセスやポイントがどこにあるかを理解させることが重要であると考えます。

長期目標：自身で考え自発的に活動する学生の養成

理学療法教育は、厚生労働省が定めた指定規則に従った基礎的なものであり、国家試験に合格しても、急激に進歩する医療技術やニーズの変化に対応するために、自己研鑽は必須である。学生の専門職としての技術研鑽に加えて、学士号にふさわしい幅広い教養や科学的思考能力を涵養することは重要である。学生が広い領域に関連した考えを発想できる環境作りや、学生の知的好奇心を刺激する授業の実践を目指す。